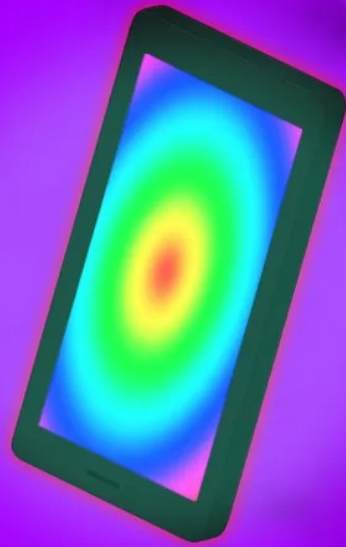


魔法学院で
ヤリたい放題
催眠寝取り
しゅにくと魔法注入する
だけだから大丈夫だよ



これは……、まさか『賢者の石』
なのか……!?

とある魔法学院に通う冴えない落
ちこぼれ生徒の僕が、偶然にも倉
庫で見つけてしまった特級魔導具
らしき物。

勿論本物とは限らない。
いや、むしろ偽物の可能性の方が
高いだろう。

始祖が人心を自在に操ったという
コレはしかし、僕の手の中で妖し
く輝いている。

そう、まるで頭の中に直接語りか
けてくるように……。

これを使えばこんな落ちこぼれの
僕でも、他人の心を自由に操れる
ようになる……ハズ!?

僕の名前はヤオサツク。
イーサミン魔法学院の2年生だ。
見た目のせいで、女子からは主に
ゴブオーク（ゴ布林とオークの
ハーフの意。人間要素どこ行った
んだよ）、略してゴブ夫君などと
呼ばれている。
まあ、学院でのカーストは推して
知るべしだ。
さて、そんな僕が倉庫からコッソ
リ持ち帰ったこの賢者の石（仮）。



誰にも見られて
ないよな…



伝説によれば、かざすだけで簡単に
相手を催眠状態にし、何でもいう事
を聞かせたり、認識や記憶を書き換
えたりできるという超チートアイテ
ムなのだ！
…本当に効くかどうか試してみた
いと思うのが人のサガ。
そしてすぐに思いつく使い方はヒト
ツしかない、そうだろうか？



第一章
魔法供給実習編
と保健委員と

僕の頭の中にまず浮かんだのは彼女だった。同じクラスのカオリワタヌキさん。ほんわかした親しみやすい雰囲気と毎朝花壇の世話をする優しい性格で、クラスの男子から人気のある女子だ。

おはよう
ヤオサツク君



その肉付きのいい体に加え、ごく自然な距離の近さとボディタッチで勘違いさせる男子を量産している。当然僕も……。

しかしそんな彼女に恋した者達は、すぐに現実を思い知らされる事になるのだ、彼の存在によって。

——同じクラスのケリー君。

ワタヌキさんの彼氏で小さい頃からお互いによく知る幼なじみでもある。

幼なじみ
彼氏



その……
いつのまにか
付き合ってたって
いうか……

…ケリー君には悪いが、やはり最初はワタヌキさん、彼女に決めた。もしも賢者の石が偽物だった場合でも、誤魔化しやすそうだしな。轟炎の姫や氷の女王で試して失敗したら退学どころでは済まないだろう。



朝の花壇で僕は彼女の目の前に賢者の石をかざし、そして念じた。放課後一人で保健室に来るよ

そして放課後…、彼女は保健室にやって来た。来たのだがその隣にはまさかの彼氏同伴…!? きき、効いてない…? や、やっぱり偽物だったのだろうか? いやでも指示通り、体操服を着てきてはいるし…。とにかくケリー君にも『賢者の石』を使わないと。僕は震える手でもう一度、二人に向かって念じた。



じゃあ今から
実習？を
やっていこう
かなうって…

と、とりあえず
その胸で挟んで
もらったり…

うう
ちよっと
恥ずかしい
かも…

そう言わずにやって
あげなよカオリ
保健委員なんだし
魔力供給の
実習だよな
経口摂取から？

う、うん…

すげえ、ケリー君にはガッツリかかっ
ているみたいだな。
それに比べるとワタヌキさんは少しか
かりが浅い気がするが大丈夫か？
いや、ここまでできたらヤルしかない。

じゃあ魔力供給の
初歩から…
まずは胸で挟んで

そう、唾液ローションも
しっかり
垂らしてもらって

トロ〜リン

グ〜ン

コキッ

ムチッ

ムチッ

んっ



あ、ああ：♥ワタヌキさんが俺のチ○ポを挟んでくれてる：っ！
クラスの男子が皆オカズにしてるこの巨乳を、こんな彼氏の前で：。
まるで夢みたいいな光景だあ：！

ほら力オリ
経口摂取だよ
ちやんと口で
してあげないと

ー、ーっう？

あふっ♥乳圧だけで
やばいの先っぽ
そんなに吸われたら：っ

まっ『魔力』出ちゃうっ！
口でっ受け止め：あ、あぁっ♥

……ふう……♥
ワタヌキさんのおっぱい
気持ち良すぎて
すぐに暴発してしまった…。



「初めてだから難しかったね、カオリ」
「うん、急に出たから驚いちゃった」
彼氏からのフォロワーに飛び散った精液をティッシュで拭き取りながら肯くワタ又キさん。そんな彼女の姿を見て、すぐに僕の息子が復活する。

「つ、つつ次は直接注入とかやってみたいな〜って！」
「え、うくん。直接はアレ持っていないとダメじゃない？」
賢者の石の力が効いてるハズなのに真面目だなケリー君は…。
とはいえここまで上手くイクと違ってなかったので、ゴムなんて用意してないぞ。
仕方ない、今日はここまで…。



あの…

私…
持ってる…
けど

「その…、ちょっとだけ違うのに興味があった」
間違いないケリー君との時に使う予定だったヤツだろ
うな…。

「ケリー君と魔力供給した
いんでしょ？じゃあ僕とこ
こで、一回しとこうよ。大
丈夫だって。ゴム付けてる
から、只の練習だよ。さっ
きみたいに失敗しないよう
にさ。ね、ね？」
必死過ぎる僕の前で頬を染
めて見つめ合う甘酸っぱい
二人。
「そ、そうだね。今日の実
習で一回経験しとくのもい
いかも。ね、カオリ」
「う、うん。大事な本番で
失敗したくないし」
「ぐふふ、じゃあ決まりか
な」
僕は満面の笑みで、恥ずか
しそうなワタ又キさんから
ゴムを受け取るのだった。

じゃあ動かすよ
ほらワタヌキさん
僕の練習チ○ポは
どう？

おつきくて…
だめえっ♥
これキモチイ
かも…

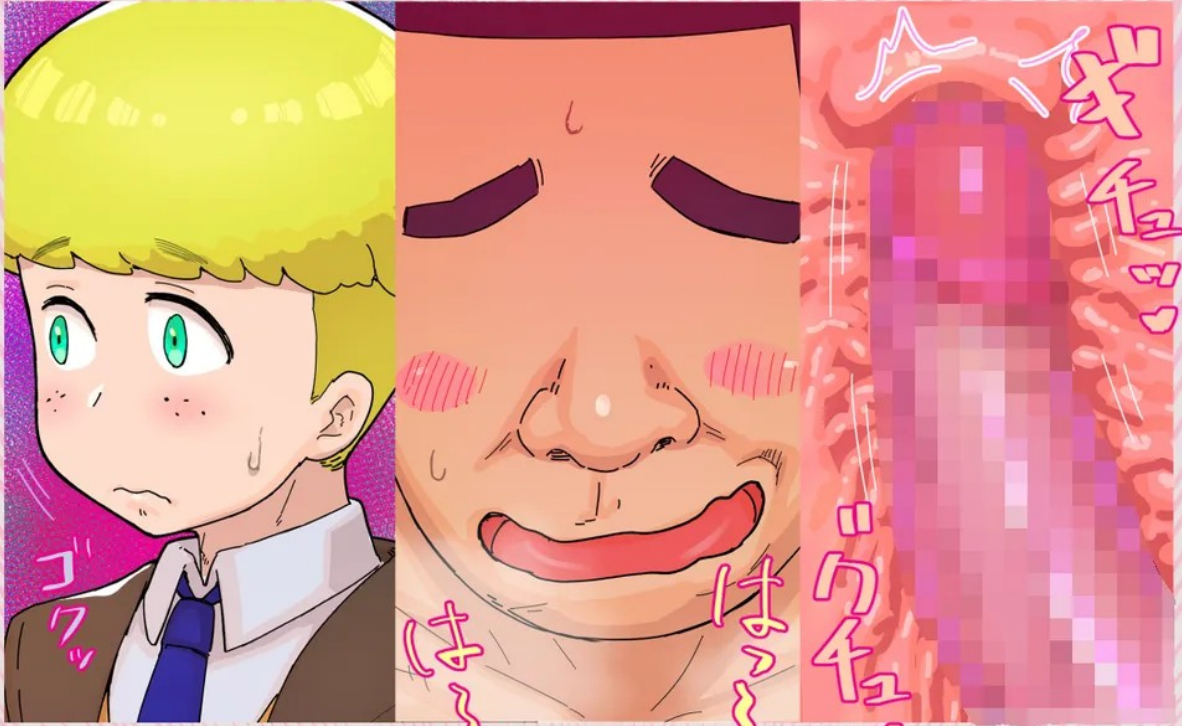
ワタヌキさんの
ま○こエッチだね♥
僕のチ○ポに
吸いついてるよ

だって…身体の奥が
ジンジンして…
あっ♥そこ…おっ♥



やばい、ワタヌキさんのナカ最高すぎる…♥
静かになったケリー君を横目に僕は、ワタヌ
キさんの上で一心不乱に腰を動かした。

突くたびに絡みつく
ワタヌキさんの膣肉に
我慢できず…



彼氏が見てる前で
僕は…

練習なのにいい…
こんな気持ちいい
なんて…
あっ♡あん♡

あぁっ♡
イクっ♡
イっちやううっ♡



もう…
『魔力』がっ
出るうっ♡

人生で初めて
女の子をイかせた…♡

ふうく…♥
ワタヌキさんとの初エッチは気持ち
良すぎて腰が抜けそうだったよ…♥

うわ…
いっぱい
出てる…♥

それにこんなに
おっきいのが
私の中に入ってたんだ…♥




あ、ケリー君
僕の端末で撮ってよ
ほら、ワタヌキさんも
こっち来て
記念にさ♥

いえくい!
初めての魔力供給実習
大成功♥



はああ、昨日は最高だったな：♥
まさかあのワタヌキさんとやれるなんて。
まるで夢みたいだあ。
昨日のワタヌキさんのカラダを思い出し
にやける僕。
これも全て、この『賢者の石』のおかげ
だな。
僕は手の中の『石』を握り確信する。



これは：
この力は
間違いなく
本物だ!!

……ケリー君には悪いけど、当然今日
も『石』の力を使ってワタヌキさんを
呼び出すつもりだ。
今度は寮の僕の部屋でゆっくりと二人
きりで：ね♥
やっぱり見られながらの童貞喪失は無
駄に緊張したからね。

それに今日は色々とやりたい事が…。



そう、このチャンスに非モテの僕が体験でき
ないであろう事を全てやっておきたい。
こんなエロいワタヌキさんの体を、あんな
『練習』だけで満足できる訳ないよね(笑)

カ、カカ、カオリ
ちゅ、チューしよ
チュー♥

珍しいね
いつもは
私からするのにな♥

そ、そうなのか

…ということ、こんな僕がイチャラブな
性春を味わうために今日はワタヌキさんに
『僕を彼氏だと思わせろ』。

じゃあ早速
魔力補給
しちやおっかな♥

も〜♥
そんな所から
魔力でないよお

ふふっ
赤ちゃんみたい
今日は甘えんぼさんだね♥



今はケリー君ではなく僕が、
ワタヌキさんの彼氏なのだ。
なので早速：♥

は〜い生ハメ
挿入〜♥
彼氏だから
いいよね



すんなり受け入れる彼女。
最初よりもしっかりと
『賢者の石』の力が
効いているらしい♥

僕の生チ〇ポ
どう？
気持ちいい？

う、うんっ♥
ヤオサツク君の
おち〇ぽ
おっきくて
すきいっ♥

ワタヌキさんの揺れるデカ尻を特等
席で眺める。
本来ならこの姿をまず最初に見る事
ができたのは彼氏であるケリー君だ
けだっただろう。



ごめんねケリー君…。
君が見るはずだったこの光景を
僕なんか先に見てしまつて♡

そして今からワタヌキさんに
初中出しもしちゃうからね♡
さあ、イクよ♡



うおおおっ!
僕のザーメンが
彼氏よりも先に
ワタヌキさんの子宮に
一番乗りだっつ!!



いや〜生ハメ
キモチ良すぎ
だろ…♥

すげ…
ザーメン
溢れてきた

これだけ出しまくったらさすがにヤバい…かも!?
そうだ、今度ケリー君にも石の力を使って中出し
しておいてもらおう…ふひひ。



僕はその後さらに何度も何度も
ワタヌキさんの生マ○コに飽き
るまで中出ししまくった…。

僕のち○ぽがお先に
たっぷりと楽しませてもらった、
この中古マ○コに…ね♥



第二章
名門お嬢様と
決闘編

無事ワタヌキさんとの『実習』が成功し最高に機嫌がいい僕。次は誰にこの『力』を使おうかなんて考えながら思わず顔がにやける。まるで神になった気分だ。

「あれ？ゴブ夫じゃなくい」そんな神である僕の目の前に現れたのは厄介な奴らで…。

声の主はレアIIグレンフィールドと言って魔術師の名門グレンフィールド家のお嬢様だ。『轟炎の姫』なんていう大層な二つ名を持っていて有名人で、後ろにはいつもの取り巻きを二人連れてくる。

僕が入学式で道に迷っていた際に彼女の兄に助けってもらったのだが、そのせいで少しスケジュールが遅れてしまったらしい。

実はこのお嬢様は重度のブラコンでそんな最愛のお兄様に迷惑をかけた僕はそれ以来、完全に目をつけられてしま…。

きゃははっ
うける〜

相変わらずキツモい顔
してるわねー！
学院より洞窟の方が
お似合いなんじゃない？

くすくす
レア様
ひどーい(笑)



それからというものの、このお嬢様と取り巻き達の時つこいイジリに耐え続けているのだ…。

しかし僕の手の中には今、『コレ』がある。
よし決めた…、次のターゲットはコイツだ。

この『石の力』を使って『決闘』を申し込むっ！

決闘

セックス

負け

キュイ…イイン…

はああく？
ゴブ夫のくせに決闘！
このあたしとお？

ぎやははっ
マジで？ W W

え？なにになに？
ゴブ夫君
どうしちゃったの(笑)



ふんっ、こいつには散々ひどい目に
合わされたからな。
こんなム力つく奴の雑な手コキで簡
単にイク訳……、あっ♡やだっ♡

はい雑魚
ち○ぽ
発射♡

っしゅ
一本目先取!

レア様ナイスです
(うわザーメンの量
す)……)

くっそ
不覚にも
秒殺されて
しまった……。
だが次は!

顔きめーぞ
ゴブ夫!

次もすぐ
イかせて
あげる♡

(ゴブ夫のくせに、手つきが
慣れてる……?)



取り巻きが見ている中、保健室のベッドの上で僕とお嬢様は、お互いの性器を無言で舐めあう…。

レ、レア様
フアイト
です…

相手もう
イキそうですよ
(おっきいから
啜えるの大変
そう…)

あっゴブ夫が
出したっ!
はい二本目も
レア様の勝利!

うっっ…!?
ごほっごほっ…
ま、まあこんな
ものね

ナイスです…
(レア様も軽く
イッてたよね?)
ゴブ夫舌使い
すごそう…)

軽く何度もイッてたのをこっちは知
ってるけど、審判役の取り巻き達は
当然、二本目もあちら側の勝利と判
定した。

三本目はいよいよ挿入：なのだが、
取り巻きの一人がすぐ出ない様にハ
ンデを上げるとか言い出して、僕に
ゴムを渡してきやがった。

…：まあいい。お楽しみは後に取っ
ておこう。

こんな不可思議すぎる状況になんの
疑問も抱かず僕の上に跨っているお
嬢様は、二本先取した事でさらに調
子に乗って勝ち誇っている。

下からはピンク色のマ○コが丸見え
だ。
今までの感じを見れば多分処女なん
だろう。
くっくっく、こいつの初めてが見下
してる僕になるのは最高に気分がい
いぞ。

じゃあラスト
三本目♡
ちよつと弱すぎ
るんですけど♡

あんたこの決闘
終わったら
罰ゲームだから
楽しみにしとき
なさいよ？

おいゴブ夫おろ
こられ土下座じゃ
済まないぞ♡

ハンデ上げた
んだから三本目は
がんばれ♡



こんな
ゴブ夫の雑魚
ち○ぽなんてえ

秒殺してあげ…
っるふうおっ♡

レア様っ!?

案の定、僕の上で固ま
るお嬢様。
顔を強張らせながらも
僕を見下ろし、必死で
強がっている。

べ、別に全然
大丈夫だし？
今から鬼ピストン
してあげるから
覚悟しなさいよ？

ゴブ夫
しっかり支えろ
へたくそ！

レア様落ち着いて
動けば大丈夫ですよ
(アレ：そういえば
レア様って私達と
違って初めてかも)

いやいや
今度は
こっちから
動きますよ

えっ？
ちよっ…！
ああんっ♡

今度は
こっちの番だ…
今までの恨みを
無防備処女ま〇こに
ぶちこんでやる！！



ほらほら
どうすか？
僕のち〇ぽ
気持ちいい？

待って
やめっ…
あめっ♡
だめっ♡

(ゴブ夫の
腰使いやば…
彼氏より
上手い…かも)

おっおい！
調子のいい
ゴブ夫おん！



い、いや
ゴブ夫が
弱すぎて
笑いましたね

さ、さすがですっ
レア様
完勝でしたよっ

ふんっ！
今日の所はこれくらい
勘弁してあげるわ！

結局、僕とお嬢様の『決闘』
は三本取られた僕の敗北と
なった。
形式的に勝ったとは言えあ
れだけの醜態を晒した後だ、
もはや罰ゲームなんてする
余裕も無いのだろう。
僕のチ○ポでの絶頂初体験
を済ませたばかりの名門の
御令嬢様は、小悪党の様な
捨て台詞を残し取り巻き達
に心配されながら少しガニ
股歩きで去っていった。
そんな後ろ姿をフンっと鼻
で笑いながら見送る僕。
『今日の所は？』
悪いけどそれはこっちのセ
リフなんだよなあ…。

はあくあ♥
ゴブ夫のせいで
暑苦しいわね〜

あれ？
今日はなんだか
いつもと
雰囲気
が違う
ようなの？

〜
4
♡

4
♡

——という事で、今度は生ハ
メしてやると意気込んでいた
僕だったが…。

何故か逆に件のお嬢様に呼び
出されてしまった。
入ると即鍵をかけられた保健
室で僕とお嬢様は二人きりで
ある。

その僕達二人の間には妙な空
気が流れていた。
どうもお嬢様の様子が変なの
だ。
さっきからまるで誘う様に下
着を見せつけている…。

戸惑う僕に業を煮やしたのか
お嬢様はさらに、意外なこと
を口走ってきた。

「あんたさあ、この前の決闘
の続き、やってもあげてもい
いんだけど？」

は、はやく
始めなさいよ

あ、はい…
じゃあ『決闘』
開始します…



んんん？どういうことだ？
まだ『石の力』を使ってないはずだけど…。
ま、まあいいか。
元々僕もこうするつもりだったし。
効きすぎてまだ効果が残ってるのかな…。



// が //
// ちゃ //
// が //
// ちゃ //

ん？
施錠されているな
レア、中にいるのか？
保健室辺りで見たと
聞いてきたのだが…

!?



あーんっ♡

ん？
レア？
そこに
いるのかい？

あっ自分
ヤオサククっす！
寝起きで変な声
出ちゃって

おっと失礼
起こしてしまっ
た
ようだね

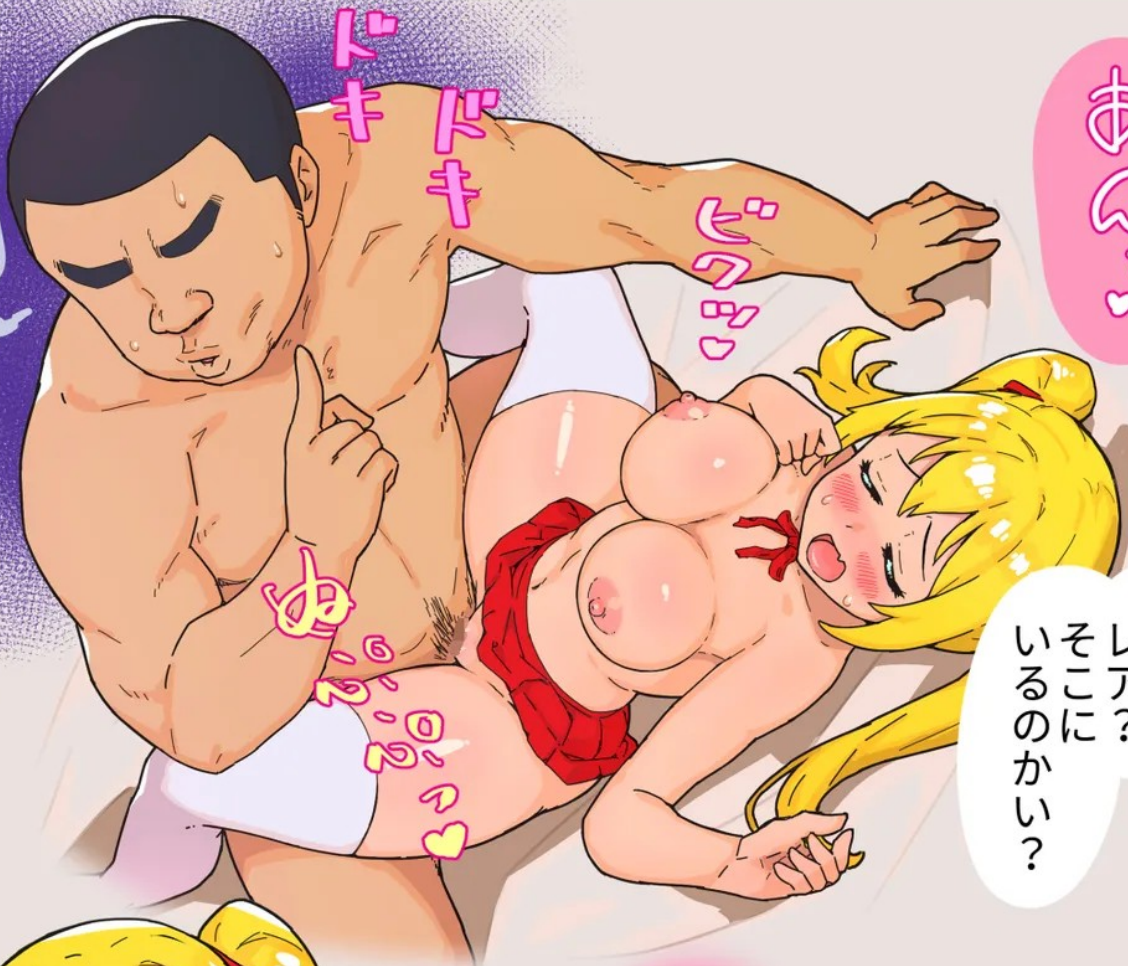
一緒に帰ろうと
妹を探していてね
もし見かけたら
校門で待ってると
伝えてくれないか

どうしよう
兄様がすぐ
近くに
いるのに

りよ、了解っす！

ではお大事に

ゴブ夫の
生おち○ぽで
お腹の中が
満たされてる♡



あ、じゃあお兄さん
待たせてもアレだし
『決闘』は一旦
中止という事で…

別に待たせて
おいてもいいわよ
だから続き…
早くしなさい♡

うおおおっ
お兄さん
すいませんっ！

そう言うと彼女はまるで甘える様になつちりと足を絡めてきた。
照れた表情とその仕草に我慢できなくなった僕は、
名門グレンフィールド家の次期当主を待たせる事に決めた…。

あんっ♡
急に激しっ♡
あっあっ♡

レ、レア様
もう…イキそう
いくよっ！

んっ♥いいよ♥
一緒にイこ♥
中にいっぱい出してえっ♥

うおおっ！
名門キツキツ
お嬢様ま○この
一番奥まで届けえっ！！

はああんっ♥
ゴブ夫の生おち○ぽで
イカされちゃうううっ♥

心地よい虚脱感の余韻を味わいながら、僕とレア様はしばらく繋がったままです。た。
戯れにレア様の乳房を吸う。叩かれると思っただけど、レア様は僕の頭を優しく胸に抱き寄せるだけだ。
意外に思ってた顔をちらっと見ると目が合った。
「また中でおっきくなってるんだけど♥」
お互いに無言で、少しの間見つめ合う。
「もう…」
焦れたようにレア様が耳元に口を寄せ囁く。
「『決闘』は三本先取、でしょ♥」

結局その後
下校時間を
過ぎてても



僕達二人は
猿の様に
ヤリ続けた
のだった…♥



第三章
風紀委員と
奉仕活動編

よくお
ゴブ夫ちゃん
よく似合ってるじゃん
この髪型♥

伸びたらまた
俺の魔法で
刈ってやる
からなく？

グリグリッ

はは…
勘弁してよ
カゼマ君…



放課後、お嬢様との『決闘』にも成功した僕が石の力を完全に確信し次の標的を考えながら歩いていると、面倒くさい奴に絡まれてしまった。

馴れ馴れしく肩を組んできたのはカゼマという同級生だ。

少し前から目を付けられ、パシリにされたり魔法の練習台にされたり…。
今、坊主頭なのもコイツの魔法のせいなのだ。

「力」を手に入れた今、こんな奴に構っている暇は僕には無い。さっさと理由をつけて退散しようとしたのだが…。
「待てよ、新しい魔法試させるって」

詠唱を開始するカゼマ。
はあ…、仕方ない。
あまり簡単にあの『力』を使いたく無いんだけどなあ…。

「そのこの生徒二人、何をしている。校内でふざけて魔法を発動させるなど、言語道断」
「力」を使おうとした僕はその凜とした声に振り向いた。

そこには『氷の女王』の名で恐れられるリオン先輩が立っている。
学院指折りの美人で有名なのだがそれ以上に、規律を厳格に守る風紀委員として恐れられていた。
校則をやぶり、氷漬けにされた生徒は少なくないとか。
「お前達二名には追って処分を下す」

いや、僕は何もしてないんだけど…。



い、いやこれはちよつとふざけてただけで…

なあ？ゴブ夫
へへへ…

はは…

——次の日、僕とカゼマは風紀委員の執務室に呼び出された。

「やべー、あのリオン先輩と直接話せるなんて…」昨日からカゼマは妙にそわそわしている。実はカゼマの奴、リオン先輩に惚れているようなのだ。勿論片思いである。石の『力』でそれを聞き出した僕は、この機会を利用してやろうと思いついた。

そう、次の標的はリオン先輩…。そして、カゼマも、だ。

ぐふふ…、あのカゼマがどんな表情を浮かべるのか、楽しみだ。

——校則違反の代償は軽い奉仕活動だった。案の定、サボりやすい外での清掃活動を選ぶカゼマ。目論見通り部屋には先輩と僕の二人きりだ。



先輩の目の前に『賢者の石』をかざす。先輩の表情が一瞬虚ろになり、すぐにまた戻った。

さて…っと、早速始めますか『奉仕活動』を♥



リオン先輩がシャツの前を自らはだ
けた。
地味なスポブラに包まれた形の良い
おっぱいが目の前に飛び出る。



おいおい、こんな生意気お乳持って
るとか風紀委員失格だろ♡
こりゃ頑張って奉仕しないとな。

あれれ？
先輩もしかして
感じちゃってます？

だいぶ息が
乱れてますけど♡



そんな事は
ない：んっ♡

え？
本当かな？

もうダメじゃないですか
こんなに濡らして
真面目な『奉仕活動』
なんですよ!?

こ…、こら
そんなに
まじまじと見るな

『氷の女王』のくせにマ〇はトロトロ
のホカホカだ♥
間近で見るとおいしそうにヒクついてい
てやがる。



うっ…うるわっ♡
あっあっ♡

うわっ♥
指に先輩マ〇ゴが
吸いついてくる(笑)

恥ずかしく
ないんですか?

風紀委員が
こんなに腰
くねらせて♥



途中でわざと『奉仕活動』を中断した時の先輩の顔は傑作だった。あの『氷の女王』がマン汁垂らしながら、いかにも物欲しそうな顔でこちらを見つめているなんて最高の景色だ♥

なっ!?!
もう終わり…
なのか?

え?
そうですけど
なにか?

い、いや…
その…

ウズ♡

ウズ♡

ウズ♡

ハァ♡

ハァ♡ハァ♡ハァ♡

ト♡ト♡ト♡

ト♡ト♡ト♡

なんて
うそうそ♥
ちやくんと一番奥まで
『ご奉仕』しますって

あ♡ん♡♡

い♡ん♡♡

ド♡ク♡

ゴ♡メ♡

おっ♥先輩の
風紀ま○こ
締めり
いいっすね♡

散々焦らした後マン汁垂らして物欲しそうな先輩マ○コにぶち込む。ちよつとチ○ポハメただけで先輩はカンタンに雌になった。

ふぁぁぁ
ゴブ夫のせいで
呼び出しとか
だるぅ



掃除もやったとか
言ってるさっさと
帰るか

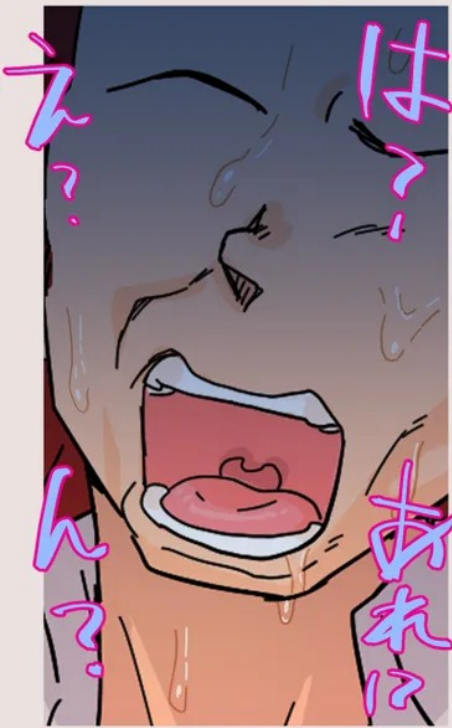
さてと、もうそろそろ
適当に掃除をサボった
カゼマが戻ってくる頃
だな。
—— 勿論、アイツは既
に僕の『力』の支配下
にある。
僕たちを見ても大丈夫
なハズだが…。
おっ、扉が開いて…。

おっ！意外といいリアクションするじゃ
らん！顔ウケるw
あの様子だとまだ効きが浅いのかもな。

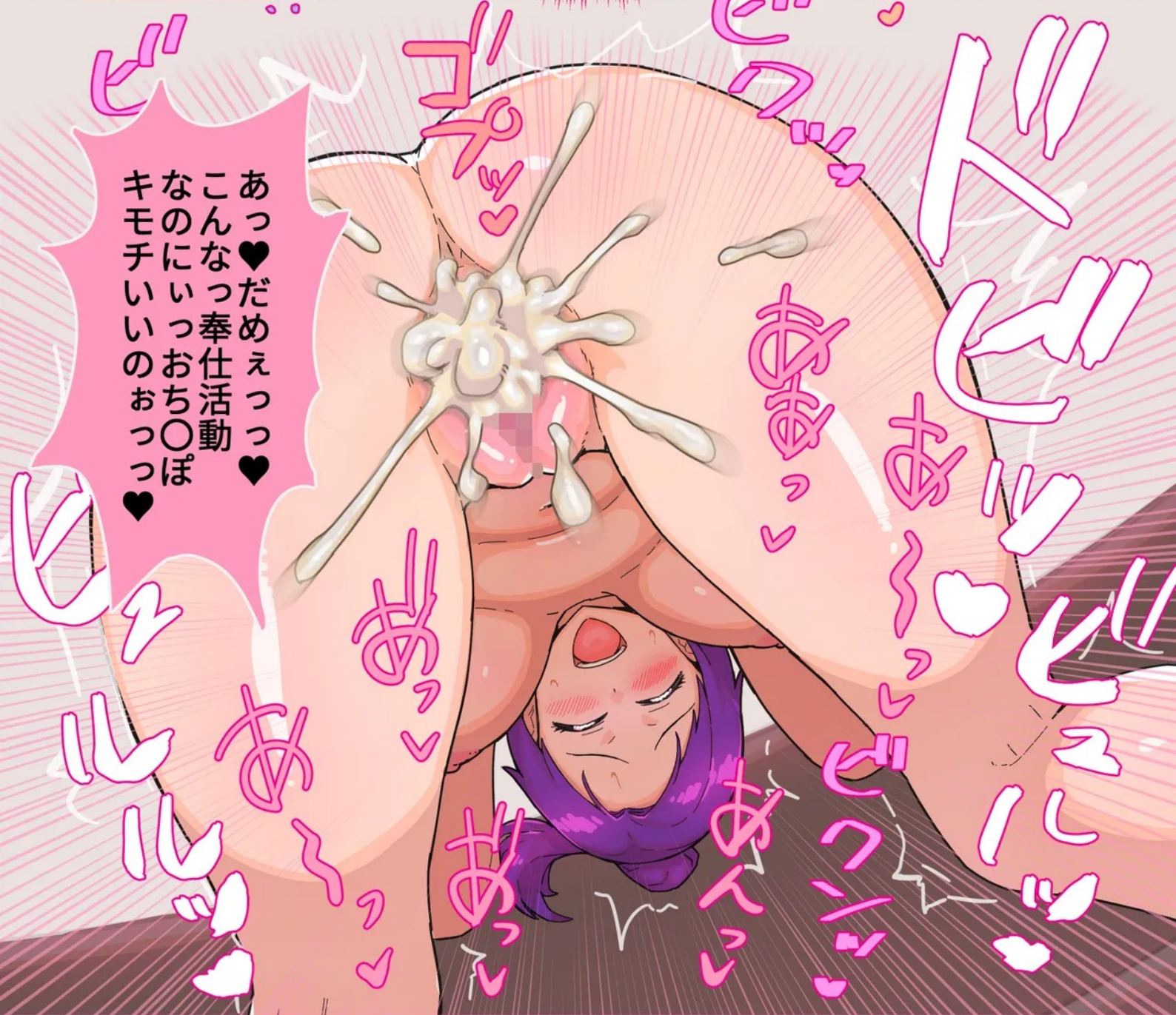


お、カゼマ君
掃除終わった？
こっちももうすぐ
『奉仕活動』が
終わりそうだよ

ほら、リオン先輩
もうイクよ♥



ぶふうつつww
 アイツの顔おもしろ
 顔面蒼白すぎだろw
 ざまあwww
 そこでぼくが先輩に
 生中出しキめるの
 しっかり
 見てろよww



あっ♥だめえつつ♥
 こんなっ奉仕活動
 なのにいつおち○ぽ
 キモチいいのおつつ♥



次の日…

「いや、何度思い出しても笑ってしまうな、あのカゼマの顔…ぶふっ。」
昨日はあの後、そのまま解散という事にして彼を帰らせたのだ。

「続けても良かったんだけど、ふふ…、いい事を思いついてね。」
という事で今日もまた僕達二人は呼び出されていた。

目の前にはリオン先輩。
普段は絶対にしないような恰好である。
隣を見るとカゼマが食い入るように先輩を見つめていた。
食いつきすぎだって、まったく(笑)
お楽しみはこれからだよ…。



二人ともよく来たな
今日は風紀委員の
私自ら

奉仕活動の手本を
見せてやろう

えっ…
マジすかっ!
うおっやっべえ!
信じらんねえ

ではまず
ヤオサックから
こちらに来なさい♥

はいっ!

(くそっ…!?)
なんでアイツ
が先に…)

露骨にガツカリした表情を浮かべるカゼマを尻目に僕は服を脱ぎ、どっしりとソファに腰を沈めた。「では最初はおち○ぽナメナメご奉仕から：♥」
「そういうと先輩は僕の足の間でねっ」とりとしち○ぽをしゃぶり出す。



はあく♥リオン先輩のおしゃぶりご奉仕最高だったよカゼマ君ち○ぽ溶けそうだ

お、おう
(くそつくそおっ！
ゴブ夫の分際で俺の先輩にち○ぽしゃぶらせやがってっ！)



次のご奉仕は
生おま○こハメハメだ
私の中にたっぷり
出していいぞ
♡

やったる
カゼマくさん
先輩と生ハメ
できるって♡

(え?は!?
先輩とゴブ夫が
生ハ:メ?)

そうだ先輩
チューしながら
やる♡
ほら早く早く♡

もう
仕方ないな
君は♡

又キゅ♡
又キゅ♡
又キゅ♡

(おいっ
奉仕活動だからって
調子乗りすぎだろ
ゴブ夫おっ)

カゼマ顔真っ赤Wてかちよつと距離近過ぎW
しかも制服のズボンがパンパンになるくらい
勃起させてるし(笑)
よくし、もっと見せつけてやるか♡



先輩のセリフに表情を歪ませるカゼマを見ながら僕は、見せつける様に体勢を変える。

だってえ：
私と相性が良すぎる
君のちんぽが
悪いんだぞ♥

もう
我がままだなあ
先輩は♥

ごめんカゼマ君
先輩がこう
言ってるんだから
仕方ないよね♥
だからほら
これでどう？

これなら
カゼマ君の
大好きな先輩の
ご奉仕ま○こに
僕のち○ぽが

出たり入ったり
しちゃってるのが
よく見える
でしょ♥



さてと、じゃあいよいよ仕上げといきますか。前回以上に見せつけながらの先輩の中出しアクメ姿を…

そろそろイクぞっ！先輩がいくとこしっかり見せてあげて♡

あぁっ
いいぞっ♡
中にっ♡

我慢ち○ぽをパンパンにふくらませてるカゼマにプレゼントしてやるっ♡

中に出してえっ♡
風紀委員のご奉仕ま○こに
いっぱい出してえっ♡

あぁっ♡
イクっ♡
イっちやううっ♡



ふう〜♥だいぶ
待たせちゃったね
カゼマ君

さ、次は君の番だよ
先輩のま〇こ
僕のザーメンで

ドロツドロに
なっちゃってる
けど(笑)

はぁっ♡

はぁっ♡

はぁっ♡

ビクッ♡

ゴッ♡

ビクッ♡

ドロッ♡

…ってあくあ
もう下校時間だね
残念!
また今度先輩に
頼んでみなよ♥

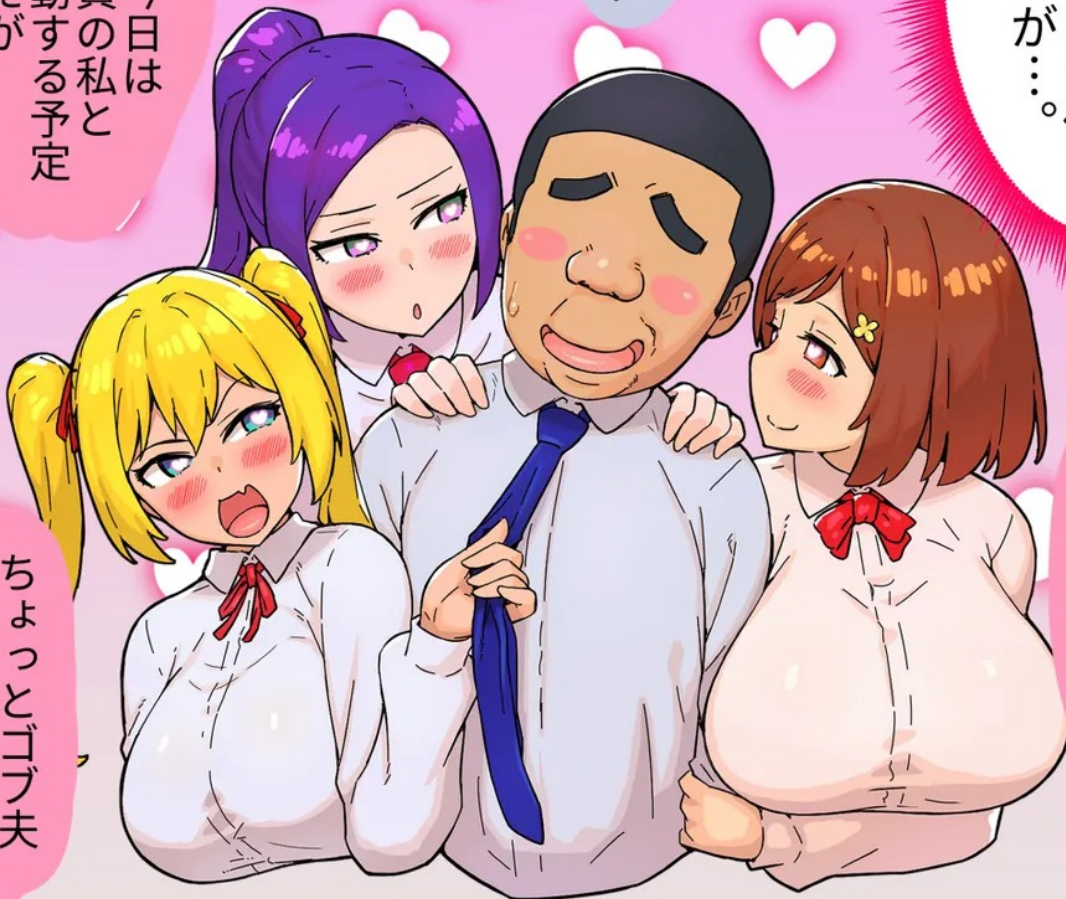
数日後、廊下を歩いていると、女子生徒が喧しく騒いでいる。会話が聞こえてきた。
「ねえ、聞いた? あの話」
「ああ、カゼマっていう生徒がああ、あの氷の女王に凍らされたってやつ?」
「こそ、なんでも急に奉仕活動がどうか言いながらリオン先輩の前で下半身丸出しになったんだって」
「しかもそのまま凍らされたから丸見えだったんだよね(笑)その後退学になったんだっけ?」
「いやー、まいったなー。どうやらあの時にかけてた催眠を、偶然解くの忘れちゃったみたいだー。ごめんねカゼマ君♥」

こうして、賢者の石の力を完全に使いこなすに至った僕だったのだが…。

いやえっと…

こら、今日は風紀委員の私と奉仕活動する予定のハズだが

ヤオサツク君また放課後に私の部屋で魔力供給の実習しない？



ちよっとゴブ夫そんなの放っておいてあたしと決闘しなさいよ！

こうなればもう、学院の女子生徒全員ヤっちゃいますから♥：なんて思っていたのも束の間、なぜか現在の僕は極めて特殊な状況に陥っていた。

あれから毎日の様に、この三人の誰かに捕まり、絞りと取られているのだ。この三人の催眠なんてとっくに解いた筈なのに…。

今日も周りから奇異と嫉妬の視線を浴びまくりながらこの板挟み状態である。がっちりと肩や腕を掴まれて、逃げることもできない。どんどんヒートアップする三人に囲まれながら僕は心の中で叫んだ。

とほほ…、もう催眠はコリゴリだよ！

魔法学院で
やりたい放題
催眠寝取り
くちよつと魔力注入する
だけだから大丈夫だよ



著者：しゅにく・2

X:@syuniku2

無断転載及び18歳未満の方の
閲覧・購入を禁止します。

R-18
ADULT
ONLY